

有識者会議の議論の整理

1 現県民会館の課題に関する意見

【第1回】

- ①オーケストラピットが手動であるため、取り外し・再取り付けが困難である。このため、オーケストラピットを使用するオペラ、ミュージカル、パレエ等、多くのジャンルの演目に影響が及んでいる。
- ②舞台の奥行きや袖も狭い。現在の敷地では舞台を広げて演者が使いやすくするのは困難である。
- ③利用者（演者）から見て、楽屋周りなど、ホール裏側のアメニティ・環境が整っていないため、利用者（演者）がスムーズに利用できるよう改善が必要である。そのためには楽屋や廊下の広さを確保するため、相当な敷地が必要となる。
- ④車道（定禅寺通）からホール内の客席までの距離も近く、観賞に向いているとは言い難い。
- ⑤女性用トイレが特に少ない。搬出入も24時間体制にするなど、思い切った考えでやらないと最新のコンテンツの提供もうまくいかない。

【第2回】

- ⑥楽屋は数が少なく、また、楽屋のすぐ脇をトイレの水が流れているような雰囲気があり、演者が気持ちを整えてステージに臨むという雰囲気が望めない。

2 県民会館の整備に求められる基本的な方向性・機能等に関する意見

(1) ホール需要等

【第1回】

- ①需要調査からは、県内にはポピュラー音楽や商業系のミュージカル等に適した施設が足りないという印象を受けた。今後は、県内だけでなく東北地方全体の需要を考慮して地域の要となる新たなホール施設が必要である。
- ②ポピュラー音楽のライブが非常に好調であり、音楽のネット配信など、テクノロジーの進歩による音楽の裾野の拡大で、幅広い年代のファンがライブに参加しており、高齢者だけでなく、若者のライブ観賞需要も多く、観客動員数の底上げにつながっている。
- ③ホールに対する需要は多く、音楽が手軽に聞けるようになり、さらに生のライブ観賞需要が拡大することで、人口減少の中であってもライブを通じた交流人口が今後も増えていくと見られる。県民会館の集客効果を県内だけを範囲として考えるのか、それとも県外からの交流人口を増やすのかという視点で考えなければならない。
- ④仙台には演劇をしっかりと演じられる場所がなく、小規模な劇場も含め、演劇活動ができる場所が少ない状態である。

【第2回】

- ⑤県民が積極的に関わっていくような、ただの鑑賞者ではなくて、小ホールで自作してみることも刺激になると思う。

(2) ホール機能

【第2回】

- ①大ホールは、ポピュラー音楽などを東北の拠点としてホストできるような機能を備えた、貸館中心に徹した方がよい。一方で、基礎自治体設置のホールなどのハブになるための機能を、中ホールや小ホールを通じて持つ必要がある。
- ②中ホールや小ホールには、大道具、小道具、衣装を含めて、ある程度の自主制作機能を持つスペースを確保する必要がある。
- ③舞台設備は可能な限り大は小を兼ねるというようにしておくことが、可能性を広げるという点で非常に重要である。また、舞台裏も含めたバリアフリーを進めるなど、できる限りのことができているということが望ましい。
- ④現在の県民会館は低音域が反射しないので温かい音が出ない。新たな県民会館を整備する際には、高性能な音響反射板が必要である。

【第3回】

- ⑤最初から小ホール、中ホールの規模や機能を議論するのではなく、県内基礎自治体が何を求めているのかを調査し、どのようなサポートをすることが県内の発展のために大事かを決めて、その後に必要なハードを割り出していくという発想を持つべきである。

(3) 整備の方向性

【第1回】

- ①2千席規模のホールを今の敷地で作るのは難しく、ほかの場所で作るのであれば、県としてやるべきことを整理すべきである。需要調査でも演劇の創造に使えるような小規模な施設が必要としており、2千席規模のホールだけでなく、複合的な機能を考える必要がある。
- ②県のホール施設としては、創造、普及など文化政策上、ホール施設に求められている機能を備え、かつ商業的な要求にも応えられるホールが望ましい。また、人材育成など市町村への支援機能を持つことで、単に大規模な興行をやるためではなく、仙台市がつくる施設とも違う意義を持つものとして、県の施設機能を考えるべきである。
- ③仮に2千席規模のホールをつくるのであれば、ホール利用が実演芸術の自主制作が主体か、または貸館が主体かによってホールのスタッフ配置も異なる。仮に自主制作主体であれば、他県の例から見ても相当なスタッフの配置が必要になる。
- ④誰のためにつくるのが重要であり、演者や観客は、最善のことが手に入る状態であれば満足するが、ホールがあることで、地域の人々や、環境に対して、どのように社会的にトータルとして影響を与えるかということを重要視しなければならない。
- ⑤施設整備に当たっては、今は不足しているものを充実させて、やりたいことをどう選んでいくかが必要な視点である。

⑥山形県や秋田県・秋田市のホール建設は、数百億円規模の事業となっている一方で、立ち見の会場ではあるが、十数億円ほどの建設費で千5百人が入るライブ会場ができる。施設整備に当たっては、コスト意識を持ち、引き算で考えることも必要である。

【第2回】

⑦ホールが貸館だけではなく、何をしてまちの発展につなげていくのかという点を描いていくことが必要である。

⑧劇場の中では様々なことが行われるので、どのような団体が主催者として展開し、そこに一般市民の方々をどのように絡めていくのか、といった点を発展させていかなければならない。

⑨有事の際に県民の一時避難ができたり、地域住民や帰宅困難者を受け入れるような場所といったハード面、ソフト面も考えた設計をお願いしたい。

⑩県の歳入を増やすような会館づくりが重要である。

⑪貸館中心の大ホールである程度収入を得ながら、持ち出しの事業として県内の人材育成などに努めるという両方の機能を持つと、県民全体への還元という形の施設になりやすい。

⑫舞台の広さと同じスペースのリハーサル室が備えられ、24時間使用のような多様な要望に添うことができる機能があればありがたい施設になる。

⑬2千席前後の座席があるホールの隣にハコだけの施設があり、芝居、コンベンション、ライブなどを行うほか、避難できるようなスペースをつくるなど、開放的なコンセプトでつくれば面白い。

【第3回】

⑭県民会館に呼ばれることが一つのステータスになる、素晴らしいアーティストが出演したいと思えるようなホールになる、といった構想を持つべきである。

⑮すぐに老朽化せずにきちんと更新もできて、100年先まで残るホールをつくり、東北一、日本一のホールである、くらいのインパクトを持ったホールをつくるべきである。

⑯県内の基礎自治体を支援するための機能を持った拠点のホールであることも考慮すると、「貸館中心」で全てをまとめてしまうと矛盾するので、言い方を工夫する必要がある。

⑰演劇は臨場感が大切なため、大ホールに兼ね備えて役者の息づかいが肌で感じられるような空間をつくることが、仙台・日本の演劇界の発展のためにも望ましい。

⑱100年規模で県民の文化の拠点となるようなものを構想するのであれば、県民が100年後にさらに豊かになるために、どのような投資をするのか、どのような計画をするのかを考えていく必要がある。

⑲クラシック音楽やオペラなど、それぞれに適切な環境があるので、必要な部分を見極めていくことが大事である。

(4) ホールの規模

【第1回】

①ホールの規模、キャパシティが多いほど集客力につながり、アーティストやイベント主催者にとっても、観客にとっても魅力ある施設となる。

②大きな場所があれば、全国大会なども行うことができる。「何でもできる」ということをキーワードにしつつ、施設の規模・大きさが何のために必要なのかを明確にすべきである。

③メインのホールを2千席規模として、小規模ホールも併設すれば、利用者にとって施設としての選択肢が増える、そのための敷地の確保が望ましい。

④外国のホールでは同じフロアの中に必要な機能が全て備わっているなど、基本条件がしっかりとしている。これからの整備の仕方、備えるべき機能というところでは大事な観点になる。

⑤そのホールを使って将来的に何をするのかによって、施設全体の規模などが大きく左右される。

【第2回】

⑥県民が使用することを考慮すると、大きいホールだけでは機能しづらいのではないかと。中小それぞれのホールに相応しいことがあるので、サイズの多様性は大事にすべきである。

⑦新しいホールをつくるのであれば、青森市文化会館(2031席)を少しでも上回って、東北一の規模になってはどうか。

⑧山形県も秋田県も約2千席で整備しており、全国的にも流行が2千席規模になっているが、歳入・歳出がどうなのかという観点から規模を考えるべきである。

⑨楽屋から袖まで一直線で行けるようなスペースを確保できる面積を持ったホールが望ましい。

【第3回】

⑩外来の招聘のオペラやバレエなどを公演するのであれば、3千席や4千席の方がビジネスになることもあり得るので、選択肢に入れて検討する必要がある。

⑪アーティストがたくさん来て公演するというのもいいが、県民の皆さんが自分達で使えるホールというのも必要である。

(5) 広域性

【第1回】

①ホール・劇場は、集客効果によって交流人口を生み出すことを踏まえれば、地域の境界を取り払った形での事業展開が必要である。

②ライブツーリズムという「コト消費」の形で、コンサートを求める多くの人たちが全国各地のコンサート会場を移動している。県民会館もアジア等からのインバウンドも含め、国内外からの集客効果を意識すべきである。

(6) 開放性

【第1回】

①市民の多くの人たちに開かれた場所であること。開かれたという解釈が多様化している中で、どういう開かれ方を採用するか、そのビジョンを持つべきである。

②ホールのある場所として、広がりがある、佇むことができる、人がそこで歩いたり、会話したりできる、そうした広がりが街の中で持続性を持っているのが重要であり、せんだいメディアテークがそうした機能を獲得していることを参考にすべきである。

③コンサートがないときであっても人が集まるような機能を持つ県民会館であってほしい。

④ホールがある場所で常に何かが行われて、何かを体験できる、ホールに集まる人々が交流し、体験を通して新たな何か生まれるということもホール施設整備の効果である。

⑤例えば演劇をコミュニケーションツールとして扱い、高齢者の孤立を防ぐなど、人が集まるという場としてのホールを活用する考え方もある。

⑥ホールとしての機能が全て備わっていれば理想だが、県民にとって負担になることも考えなければならない。新たな県民会館を整備するならば、県民が繰り返し施設を楽しめるよう、物産館などを備えた施設にしてほしい。

【第2回】

⑦人々が集う場所とするならば、劇場に入る前に広場があって、建物があって、その中に様々な機能があるのが理想的である。

⑧これからのホールには、ホールに直接関係がある人もない人も、その場所に同席する、共存することで、新しい文化的な刺激をお互いにやりとりしながら、都市という文化を盛り上げていくような機運が出ている。

⑨単にオープンスペースがあるのではなくて、どのような開放性、連続性を獲得するかによって、県民会館が東北一、日本一、世界一のホールになっていけるかが課されていく部分もある。

(7) 市町村連携・人材育成

【第1回】

①劇場法やその指針を踏まえ、県民会館は、県の文化振興の基幹施設として市町村のホール施設と協力すべきであり、スタッフ研修の場の提供や、公演の共同制作などを通じて、市町村のホール施設を担う人材育成の場として機能を果たすことが必要である。

②県と市町村が連携するに当たっては、教育普及を目的とした専門的スタッフの配置が必要である。ハード面での整備検討と併せて、スタッフ配置のイメージを持つべきである。

③県は、広域自治体として市町村との間で県民会館を活用したネットワークのハブ機能を持つべきである。また、文化的な環境が十分ではない地域でのアウトリーチなど、市町村ではできないところを県として補うべきである。

④県内各ホールのスタッフの人材育成を県がサポートすることが大切であり、ステージ裏方の仕事や、ホールの運営について、経験し、育成できる場が必要である。

⑤ホール・劇場から何を発信していくのかを考えるとともに、ホール・劇場をベースにして、実演芸術を担う人材を育てて社会に送り出すことができるようホール・劇場のあり方を考えるべきである。

【第2回】

⑥基礎自治体のホールのハブになる機能は持つ必要がある。

⑦基礎自治体設置のホールの人材育成に関しては、教育普及を担える人材を育てることも大事な機能だが、それに限らず、基礎自治体のホールで行うべきことをできるような専門人材を育てる機能が必要である。

⑧県内の基礎自治体の施設の職員を研修生として受け入れる、共同で制作をして学ぶ機会をつくるといった機能を持つことを考えていくべきである。

【第3回】

⑨県でしかできない、県民会館ならではの規模を持ったハードやソフトを充実させ、そこからいい人材を輩出し、また戻ってきて、宮城県に様々なお客様を呼び込めるような施設になっていくことが望ましい。

(8) 役割分担

【第1回】

①ホールが持つべき機能への要求が増えており、要求の達成が難しくなっている。複数のホールで機能分散を図り、それぞれのホールが持つ機能を高め、県全体として構成することで文化振興の底上げにつながる。

②新たな県民会館が整備されることで仙台市内のホール利用の選択肢が増える。県と仙台市の間で役割分担を図ることが必要であり、選択肢や可能性が増えれば、利用団体の活動の幅がさらに広がる。

【第2回】

③2千人規模のホールが2つあったときに、それぞれが活かされる形、うまく棲み分けできるような形を探り、それぞれが一体何をするのかをこれから具体的に考えていかなければならない。

④2千席のホールがどのような距離感であればいいのかという点は、難しい問題である。

【第3回】

⑤仙台市がつくるのがクラシック音楽のようなハイアート中心的なものだとすれば、県はポピュラー音楽や商業的なミュージカルができて、東北中から人が集まる拠点をつくるところに重要性がある。

⑥多くの基礎自治体設置のホールは、企画能力などにおいて色々と苦労しているので、県内基礎自治体を支援する機能は県が担うべきであり、仙台市では行わない機能である。

⑦オーケストラを附属オーケストラ的に考え、その拠点施設としてのホールと、附属の劇団や芸術団を持たないホールという区分けで、相当違いが出てくる。

⑧ホールをつくった後でも多少方針を変えなければならないことが起こりうるので、最初の段階で棲み分けの形を全て見通せないのであれば、ある程度余裕を持って決めていくことが必要である。

⑨仙台市はクラシック音楽重視型のホールで、県民会館はあらゆるエンターテイメントに対応する劇場型になる。音楽ホール系は、音が響き渡りきれいに聞こえるようにするため、客席のスロープが緩やかである。一方、劇場型は、客席が割と急斜面で、できるだけ視認性が良く、残響音を少し抑えた方がいいというように、特性が自ずと出てくるため、同じキャパシティでも全然違うホールになる。

⑩音響反射、残響時間の反射音の設定も、県民会館は1.1秒から1.4秒程度、仙台市の音楽ホールは1.4秒から1.8秒程度の残響というように、残響時間の設定の違いでも相当な区別ができる。

⑪まだできていないホールに対して棲み分け論をあまり詰めすぎても仕方がない。今までの県民会館にあった欠点を解消し、あらゆるエンターテイメントに機能強化し、県民に最もふさわしいホールをつくることで、自ずと人も集まるし、吸引力が出てくる。

⑫棲み分けを考えるのではなく、何が県民にとって一番いいのかを考えていくことが、結果的に個性も出て一番いい形になる。

(9) 技術革新対応

【第1回】

- ①ポピュラー音楽のコンサートでは、舞台設備上で使える技術・テクノロジーがここ数年で大きく変わってきている。照明のLED化や、音響のデジタル化など技術的に追いつくのが難しく、変化に対応できないホールは、使えないホールになってしまう。
- ②ホールの機能を支える設備については、近年テクノロジーの進化が著しく、最新の設備であっても5～10年で陳腐化してしまう傾向にある。テクノロジーの進化に対応していくことを前提にホール整備を検討する必要がある。
- ③改修工事をする場合でも決定に至るまでのプロセスの長さや時間経過により、最新のテクノロジーの変化に対応しきれない場合も想定される。

(10) これまで培ってきた機能の継承

【第1回】

- ①現在の県民会館が醸し出す雰囲気は、一旦失ってしまうと簡単には元に戻せない。単に最新の技術で新しい施設をつくれれば、役割を果たしたということではなく、これまで培ってきた建物の趣や、佇まいを継承していくことも、新しい施設にとって意味がある。
- ②現在地がどうなるかも大事な要素である。現在地で培ったことや、残された場所に関わる人たちにどう受け継がれていくかということを考えて、新たな県民会館の整備に生かしていくことも必要である。
- ③移転した場合の跡地をどう生かすか、海外にも見習うべき良い事例があるため、分析や選別をしながら検討していくことも必要である。
- ④これまで培ったことを踏まえて新たな県民会館の整備を検討すべき。どうすれば新たな県民会館を後世に伝えていけるかということを、しっかりとシナリオ、事業として構築し、プロジェクトとして進行すべきである。
- ⑤劇団四季のロングラン公演も県民会館の強力なコンテンツのうちの一つであり、今後どう活用していくかも考えるべきである。

【第2回】

- ⑥現在地が都市の生活にとって非常に重要であることを考慮すると、移転した場合に現在地をどのように埋めていくのか、現在地がどのように連動して使われていくのかという点が非常に重要になってくる。

3 県民会館の整備に求められる立地条件に関する意見

(11) 現地建替

【第1回】

- ①仮に現在地で建て替えるとすれば、かなり小さく、ダウンサイジングでコンパクトにつくることも考えとしてはあり得るが、今回の議論も踏まえた県の拠点文化施設としての命題とは異なるため、現地建替は方向性としては考えにくいのではないか。
- ②ホールのあり方が法的にもはっきりとしてきており、人材育成や開かれた広場として、県民会館がその機能を担うべきである。それを具体的な建物に落とし込んだときに、どういう場所、敷地が必要になるのか。現在地では、必要なキャパシティーや機能も盛り込もうとすると、相当厳しいのではないか。

③仮に立地が現在地に限られるということであれば、小規模であってもクオリティーの高い作品を送り出せるようなホールをつくれれば、「将来はその舞台に立ってみたい」と思うような演者の憧れの場所となり、次世代を担う実演芸術の人材が輩出できる。

④現県民会館は老朽化が著しく、これに手をかけ、お金をかけてというのは、あまり有効なことではない。現在地にも立地の課題があるため、新たな場所で、ホールの交流・発信等の機能や、人材育成機能を踏まえて建てるべきである。

【第2回】

- ⑤座席が狭く、バックヤードを考慮すると、現在の敷地に2千席規模のホールは物理的に難しい。
- ⑥現在の敷地に2千席規模のホールをつくと、面積全部が座席とステージになってしまい、通路や動線を確保することが困難である。
- ⑦県民会館は、定禅寺通や公園、せんだいメディアテークなどの文化的な機能との連続性ができつつある。移転したとしても、公園やスポーツ施設などと機能的につながることが求められている。
- ⑧現地で高層化した施設を建設することも技術的には考えられるが、下から上に運ぶ動線が必要となる。そのための設備にかなりの体積、面積を要する。
- ⑨2千席規模のホールだと、幕間に休憩で席を離れる人が半分だとして、それを受け止められるような空間をつくるには、現地では狭すぎる。
- ⑩火災等の有事の際に観客や演者が逃げられる空間を確保することも必要になる。現在の敷地では、そのような空間を確保することは困難である。

(12) 新たな県民会館の立地条件

【第2回】

- ①街とのつながりを持つ、観光需要と結びついた立地が必要であり、集客性のある場所を前提に立地を検討すべきである。
- ②仙台市は地下鉄やバスが充実していることを視野に入れておくべきである。県民会館はふいにチケットがあったので行ってみるといような、交通の利便性が高い所がよい。
- ③人気のあるアーティストの公演では、立地ではなくキャパシティーが一番重要である。公共交通機関のない遠方に立地した場合は、駐車場を多く設置することで解決することができる。
駐車場はキャパシティーの7割程度の台数が望ましい。
- ④地方の公共交通機関のブラッシュアップにつながっていくことも意識し、公共交通機関できちんと人を流動させることができる場所を視野に入れるべきである。

【第3回】

- ⑤JR仙石線の宮城野原駅から1駅戻ったり先に行ってから電車に乗ることで、人が集中することを拡散でき、野球の試合時に大勢の方が集中するといった問題をクリアできるのであれば、仙台駅に近く県外からのお客様も来やすいので、仙台医療センター跡地が理想的な場所である。
- ⑥コンサートが終わって一杯飲んで帰りたいという時には、公共交通機関がある方が気分的に非常に楽なので、仙台医療センター跡地の宮城野原駅から直結という交通アクセスは大きな魅力である。

- ⑦流動性が高まると、結果的に住み心地が良い、居心地が良いというようにアップグレードされていく、良い循環ができてくる。アップグレードしていくための、二の矢、三の矢を考えていくことが重要なので、仙台医療センター跡地は非常にやりがいのあるロケーションである。
- ⑧様々な機能が分布しているようなゾーンに県民会館が投入されることで、新しい県民会館としての意味合いが移植されるような、相乗効果が期待できる。
- ⑨仙台駅東口が発展して新しい仙台の顔になってきているので、県民会館が新しく生まれ変わって運営していくには、仙台医療センター跡地は非常に良い立地である。
- ⑩県のつくる新しいホールとして、東北地方の一つの拠点であるという象徴的なことや県内基礎自治体のホールのハブ機能を持つことを考慮すると、公演がない時でも人が来るような場である必要がある。仙台医療センター跡地は単に駅に近いというだけではなく、近隣商業地域であるという点においても大きなメリットになる。
- ⑪文化施設は、単独で立地しているというよりは近隣に文化的な施設が集約、複合してくることがまちづくり的な観点からは良い。